

3月1日に神林体育館にて約130名が集まり、神林地区球技大会が開催された。開会式の挨拶では丸山勝久大会長のスポツを楽しむことの大切さについて話があった。試合では選手や観衆からの大きな声が出ており、皆で楽しみながら、そして白熱した試合が行われた。



開催 神林地区球技大会



令和8年3月1日現在	総世帯数	2,093世帯
	総人口	4,718人
	男	2,314人
	女	2,404人

ラージボール卓球とソフトバレーボールの2種目が行われ、ラージボール卓球では南荒井町会、ソフトバレーボールは川東町会がそれぞれ接戦を制して優勝した。



- ◆ラージボール卓球
 - 優勝 … 南荒井町会
 - 準優勝 … 下神町会
 - 三位 … 梶海渡町会
- ◆ソフトバレーボール
 - 敗者復活優勝 … 町神町会
 - 優勝 … 川東町会
 - 準優勝 … 寺家町会
 - 三位 … 町神町会



川西町会の6年ぶり三九郎
1月10日〜12日の期間に各町会の三九郎が行われた。強風の影響によりやぐらに火をつけられずやむなく中止した町会もあったが、川西町会では6年ぶりに行われた。

初めて参加する子どもたちは親御さんに協力してもらい、残り火の熱さと煙に耐えながら繭玉、マシユマロを焼いて食べていた。
毎月2回、神奈川県から松本空港の写真撮影に訪れている三代澤さんも参加し、町会から依頼された写真撮影をしながら松本の三九郎を楽しんでいた。
準備から片付けまで多くの人の協力が必要だが、地域の伝統行事としてこれからも続けてほしいと願う。



市長交え空港対策懇談会開く 市道整備等に一億六千三百万円

2月16日、神林公民館で地区空港対策懇談会が市長を迎え開かれた。空港の離着陸を二十便に向けた協議と神林地区の要望に対し、定期的に開く事になった懇談会です。市長はじめ、市幹部と意見が交わされた。

市長からは「空港対策関連事業として一億六千三百万円を令和八年度予算に盛り込んだ。」と説明があった。そのあとに地区の要望9項目、詳細



和泉家志ん治さんによる手品が披露され

笑いながら健康づくり 笑ひながらの健康づくり

1月21日に神林地区人権啓発推進協議会が開催した「笑い」は最高の薬(百薬の長)では、和泉家志ん治さんによ

る人権を切り口にした落語、和泉家志ん治さんによる手品が披露され

ました。笑いを通して、人権について考える貴重な機会となりました。会場は終始和やかな雰囲気になりました。参加者からは、「気分が前向きになった」「ぜひまたお二人を見たい」との声が多く寄せられ、今後の開催にもつながる有意義な学びの時間となりました。笑う門には福来る。笑いは心と体の健康につながることを改めて実感する機会となりました。神林地区人権啓発推進協議会 会長 田中 一利

あるやの話も出ていました。最後に、航路直下の地元へ寄り添う行政による新たな定期的懇談の機会を長野県と共設けていくとの事で、期待がかかります。



過去と今を知り 未来を考える

1月25日、「上高地の昔と今」を観て、聴いて、語ろう」を図書視聴覚委員会が開催しました。

この企画は、上高地の昭和初期の様子を記録したフィルム映像を観た後、講師としてお迎えした、自然公園財団上高地支部顧問 加藤銀次郎様から、上高地の歴史や自然環境の変遷、今の様子や魅力について、講演いただきました。企画の最後には、茶話会を行ない、神林地区にある

キーワードはなに?

本誌神林版の記事内に散りばめられているキーワードを見つけて言葉にしてください。分かった方は神林公民館に備え付けの用紙に必要事項を記入してご応募ください。正解者の中から抽選で**5名に500円分のQUOカード**をプレゼント!

締切は**4月17日(金)**。当選発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。多数のご応募お待ちしております!

【前回の答え】 **とろきこりん** 【今回のキーワード】 ○○○○○○○○

「Garage Cafe 初茶」にご用意したいたいたお茶とお菓子を楽しまながら、今日の感想や上高地の思い出を語り合いました。

本企画を通じて、過去を知ることによって現在の上高地をより深く理解し、未来へと守り伝えていくきっかけとなれば幸いです。

図書視聴覚委員会 委員長 倉科 智子

鎖川

中学校の部活動の地域移行という動きがある。子どもの減少と教員の負担が大きいといった現場の状況に対して、文部科学省が「部活動改革及び地域クラ活動の推進等に関する総合的なガイドライン」を令和七年に策定し、各自自治体で進めている。

学校は地域の子どもたちを預かり、育てる中心的存在であるが、地域は学校とは距離を置きがちではなかった。PTAを通して地域行事などの繋がりもあるものの、その繋がりも減少の傾向になることが予想される。

部活動の地域移行は単に学校の負担を地域が肩代わりする話ではない。学校が持つ教育的価値や子どもへの理解を地域がどう受け継ぐのか、地域が持つ多様な経験や人材を学校がどう教育に取り込むのか、互いの強みを理解して分担できれば子どもたちが学校と地域の両方から経験を積むことができる。それは地域の価値を高めることになる。まずは、学校と地域のつながりを自分ごととして捉えることから始めたい。